別記様式第７号

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

１．申請者氏名	山本　直樹
２．審査委員	主　査：釜田　聡 副主査：越　良子 委　員：大前　敦巳 委　員：森廣　浩一郎 委　員：別惣　淳二

３．論文題目

保育者養成におけるドラマ表現活動の教育的価値の実証的検討

－他者との関わりを大事にする「協働的な学び」の実践を中心に－

４．審査結果の要旨

学校教育実践学専攻学校教育方法連合講座　山本直樹 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第 16 条に基づき、下記のとおり審査を行った。

論文審査日時：令和８年２月１５日（日）　９時００分～１１時００分

場所：Zoom によるオンライン実施（ホスト：上越教育大学　美術棟　釜田研究室）

１．学位論文の構成と概要

本論文の目的は、保育者養成におけるドラマ表現活動に着目し、上演の成否や作品の完成度よりも創造の過程そのものに教育的価値を見いだす立場から、保育者養成の授業においてドラマ表現活動がどのように位置づき、どのような学び（とりわけ「協働的な学び」）を導入・促進しうるのかを明らかにすることである。本論文は第１章から第４章までの４章で構成されている。

第１章　問題の所在と課題の明確化
　第１節　研究の背景
　第２節　保育者養成におけるドラマ表現活動に関する研究の動向と課題
　第３節　研究の目的と意義
　第４節　研究方法と内容構成
第２章　「保育内容（表現）」におけるドラマ表現活動の活動内容の分析
　第１節　「保育内容（表現）」のシラバスへの着目
　第２節　シラバスの分析結果
　第３節　シラバスにおける活動内容
第３章　保育者志望学生のためのドラマ表現活動の授業計画と実践研究
　第１節　授業全体のテーマと内容
　第２節　他者との関わりを大事にするドラマ表現活動の実践
　第３節　ドラマ表現活動への主体的な参加を促す工夫の検討
第４章　総括と展望
　第１節　保育者養成におけるドラマ表現活動の活動内容の類型化
　第２節　保育者養成におけるドラマ表現活動の教育的価値
　第３節　ドラマ表現活動の実践的意義と授業実践力の向上

各章の概要は、以下のとおりである。

第１章では、保育者に求められる対人関係力・表現力・非言語的コミュニケーション力の重要性を背景として、養成課程における授業実践上の課題を整理した。次に、CiNii Researchを用い1985～2025年1月の文献を四段階の検索と本文確認で絞り込み、保育者養成に限定した先行研究29件を概観した。その結果、研究動向を①ドラマ表現活動を領域「表現」の学びとして再構成する研究、②他科目の学びを目指す研究、③実態把握を目指す研究の3類型に整理した。分類Ⅰは質的充実が進む一方で自己検証的研究が多く、分析視点・検証手続きの不明確さが再現可能性・比較可能性の課題となった。分類Ⅱは教授法改善への応用が見られるが体系的関連が乏しく、活動定義や実践記述の簡素さが課題であった。分類Ⅲは多様な視点で実態把握が試みられるものの、調査範囲や対象・年度・項目の限定性が課題であった。
以上を踏まえ、①活動内容の類型化不足、②研究手続きの不透明さ、③主体的参加を阻む心理的障壁の高さを実践研究上の課題として抽出し、本研究が「活動類型化」「手続きの可視化」「参加支援の具体化」の3側面から検証すること、ならびに研究方法（シラバス分析・授業実践・内省記述分析）と章構成を提示した。

第２章では、保育者養成校の授業科目「保育内容（表現）」のシラバスに着目し、ドラマ表現活動を授業全体の核として構成した2013年度のシラバス12件を対象に、活動内容の抽出・分類を行って授業の全体傾向と標準化に向けた基盤を明らかにした。対象を「ドラマ表現活動が授業の中心に位置づくシラバス」に限定し、活動記述を抽出して比較可能な形で整理した点に方法的意義がある。分析対象12件に含まれる計180活動を整理した結果、活動は①ウォームアップ（29）②即興（42）③指導法（39）④学習総括（53）⑤授業運営（17）の5カテゴリーに類型化できた。各カテゴリーは、体験準備、台本に縛られない即興挑戦、子どもの即興活動の指導法、成果共有としてのまとめ、ガイダンスや試験等の運営要素をそれぞれ示す。この類型化により、学生の即興体験を起点に指導法へ接続し、成果共有を通して学びを統合する授業構成の基本モデルが示唆され、保育者養成に適応したドラマ表現活動の開発・設計に資する参照枠を提示した。

第３章では、保育者志望学生を対象にドラマ表現活動の授業実践を計画・実施し、学生の内省記述にもとづいて、活動がもたらす学びの構造と主体的参加を促す支援のあり方を検討した。分析には内省記述を対象とする計量テキスト分析（語の出現頻度・共起関係・記述間類似性等、補助的にKH Coder）を用いた。実践①「彫刻家と粘土」（2022年度・2年生41名、回収率97.56%）では、二人組で身体を「借りる・委ねる」非言語的協働を通し、他者意図の汲み取り、表現差異の受容、協働による表現の拡張への気づきが示された。特に言語を使わない制約が身体・視線・間への注意を促し、関与の質を高めることが示唆された。実践②「バンダナの活用」（2023年度・2年生39名、回収率94.9%）では、身近な素材を小道具・衣装の代替として用い、発案・発表・鑑賞の各場面で創造的思考と表現意欲を喚起し、安心感を与える支えとして機能することを確認した。
以上より、非言語的制約と素材的支援が心理的障壁を下げ、主体的参加を支える足場となることを明らかにした。

第４章では、全体の知見を統合し、保育者養成におけるドラマ表現活動の実践的・学術的意義を総括した。総括として、①ドラマ表現活動で構成された授業の活動類型を提示し、実践者が参照可能な標準化の枠組みを提供したこと、②「彫刻家と粘土」の内省記述構造の分析により、学びの生起過程を可視化したこと、③身近な素材であるバンダナが心理的支えとなり、主体的参加を促す参加支援として機能すること、の3点を明確化した。さらに教育的価値を「協働的な学び」との関わりから、(1)他者のイメージを汲み取る意欲の向上、(2)差異を価値として受容する学び、(3)協働による表現・創造の拡張の実感、の3点に整理した。
以上より、ドラマ表現活動の充実と授業実践の進展に資する知見を提示し、学校教育実践学の質的充実への寄与を示した。今後は、類型の適用範囲拡張、評価手続きの精緻化、学習成果の追跡に加え、特定年度・特定資料に依拠する限界を踏まえ、対象範囲の拡大や複数資料の突合による検証が課題となる。

２.審査経過

本学位論文の審査は、主として次の観点に基づき行われた。

(1) 研究目的の妥当性と論文の構成

まず、本学位論文の学問領域における位置づけを確認した。その上で、研究対象としてドラマ表現活動を取り上げる必然性、計量テキスト分析とシラバス分析の関係、ならびに第２章と第３章の論理的接続を中心に審議した。これらの審議を踏まえ、研究目的の設定根拠、研究方法の位置づけ、各章の役割および論旨の一貫性を確認し、研究の枠組みと論理展開が妥当であることを確かめた。

(2) 学位論文の独創性や発展性

本学位論文は、保育者養成におけるドラマ表現活動に焦点を当て、その学習過程の成果を捉えるにあたり、従来の実践報告に見られた手続きの不透明さを補う形で、評価・分析の手続きを可視化した点に独創性が認められた。

また、保育者養成に適応したドラマ表現活動の授業開発に向けた方向性を示すとともに、研究者・実践者が共通の視点と枠組みを共有しやすい標準化の基盤を提供している点で、我が国におけるドラマ表現活動に関する議論の深化および実践知の体系的整理を促進し得る発展性があると認められた。

(3) 学校教育の実践への貢献および社会的貢献

本学位論文は、大学生の協働的な学びの意義および幼児への影響可能性を踏まえ、保育者志望学生が他者の表現意図を汲み取り、差異を受け止めながら共同で学びを進める過程、ならびにその過程で形成される非言語的コミュニケーション力と参加を支える関わりに着目して検討した。

その結果、ドラマ表現活動の特性を生かして「協働的な学び」の充実を図るという概念的貢献を示すとともに、学習場面の拡充を通じて幼児の多様な表現を保障する保育の充実に資する点で、幼児期の教育実践の質的向上に寄与し得ることを確認した。加えて、授業設計および評価の観点を共有可能な形で提示しており、ドラマ表現活動の一般化・展開可能性を高める社会的貢献が認められた。

３.審査結果

以上により、本審査委員会は、山本直樹の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。